

三嶋輝夫「古代ギリシャ哲学、文学における恐れ」発表要旨：

本発表の目的は古代ギリシャにおいて〈恐れ〉がどのようなものとして把握されていたかを明らかにすることにあるが、そのことを通じて、西洋近現代において恐れ理解がどのような変容を遂げたのか、また日本における恐れ理解の特質はどこにあるのか、を浮かび上がらせることに、少しでもお役に立てれば幸いである。

以下、先ずプラトン(前427-347)とアリストテレス(前384-382)の著作を中心に、古代ギリシャ哲学において〈恐れ〉が理論的にどのように分析されていたかを探り、次いで古代ギリシャ悲劇を代表するソフォクレス(前496-406)『オイディプス王』の主人公たちにおいて、どのような形で恐れが表出されているのかを検討することとしたい。

[I] 古代ギリシャ哲学における〈恐れ〉

A. プラトン：基本的に勇気論の文脈で主題化される。

(1) 恐れ志向性：「これから生じる悪いことの予期」(prosdokia mellontos kakou) としての〈恐れ〉(deos, phobos)

志向対象：「よいこと」あるいは「どちらでもないこと」は外れる。

「悪いこと」は「恐ろしいこと」(to deinon) と書き換えられる。

〈恐れ〉 = 「恐ろしいこと」が起きる、もしくは起きるかもしれないと思うこと

(2) 恐れ時間性：過去・現在は外れる。

まだ現に存在しない何らかの悪に関わる。

→ 『ラケス』(資料①)

『プロタゴラス』(資料②)

B. アリストテレス：説得の基礎論としてのパトス論と、勇気論の文脈で問題とされる。

(1) 〈恐れ〉と表象：単純な条件反射ではなく、表象が介在。希望を抱いていることも必要
⇔ 将来に無関心な者は恐れない。(Cf. イオカステ)

(2) 〈恐れ〉の遠近法：必要条件としての時間的切迫

(3) 「最も恐ろしいもの」としての死：「一番悪いこと」としての「死」の到来可能性とどう向き合うか、どのようにして死に対する恐れを克服出来るか、が問題となる。勇気ある者は「怖いもの知らず」ではないとされ、また獣の「勇気」と区別される。

実例：『弁論術』(資料③)

『ニコマコス倫理学』(資料④)

[II] 古代ギリシャ悲劇(『オイディプス王』)における〈恐れ〉

(1) オイディプスの場合：彼の恐れは己の出自、「自分は誰の子なのか」、が明らかになることに集約される。(資料⑤)

ここで注目すべきは、彼の母にして妻であるイオカステの言葉(資料⑥)。

(2) イオカステの場合：人間の予見(pronoia)の不完全さの強調と恐れることの無意味さ
→ 究極の刹那主義 = 「気ままに生きる」(eikei zen)、文字通りには「アット・ランダム」「行き当たりバッタリ」に生きること。→ 超越者に対する〈畏れ〉の希薄化

[資料]

①「さて私たちは、恐れを引き起こすものを<恐ろしいこと>、他方、恐れを与えないようなものを<平気なこと>と考えています。ところで恐れを引き起こすのは、悪いことの中でも、既に生じたことでもなければ、現在あることでもなく、予期されることなのです。というのも、<恐れ> (deos) とは、<これから生じる悪についての予期>だからです。」

(プラトン『ラケス』198B、拙訳、講談社学術文庫)

②「ところで、どんなものでしょう。・・・あなた方が『恐れ』(deos)とか『こわさ』(phobos)とか呼ぶところのものがありませんか？そしてそれは、この私がそう呼んでいるものと同じでしょうか。・・・私は、悪い事柄に対する一種の予期のことを言っているのです。それをあなたがたが『こわさ』と呼ぶか『恐れ』と呼ぶかは別として。」

(プラトン『プロタゴラス』358D、藤澤令夫訳、岩波文庫)

③「さて恐れとは破滅、あるいは苦痛をもたらす差し迫った悪いものについての表象から生じる一種の不快、あるいは心の動揺(lype tis e tarache ek phantasias mellontos kakou)

であるとおこう。というのは人々が恐れるのは全ての悪いものではなく、例えば不正な奴ではなかろうか、あるいは愚鈍な奴ではなかろうかなどと恐れるのではなく、むしろただ大きい不快、あるいは破滅をもたらすことの出来るもの、それも遠くではなくて、目前に迫るほど近くに現れているものだけを恐れるのだからである。というのも、ひどく遠くにあるものを人々は恐れられないからである。例えば、誰でも皆人は未来に死ぬということを知っている。しかし、それは近くにないから、少しも気にすることはない。」

(アリストテレス『弁論術』第2巻第5章、山本光雄訳、岩波書店)

④さて、勇気とは恐れと大胆さに関わる中間性であることは、すでに明らかになった。明らかに、我々が恐れるのは、恐ろしいものであるが、これは端的に言えば、悪いもののことである。したがって、恐ろしいものは、実際また「悪いものの予期」とも定義される。

こうして、我々はあらゆる悪いもの、例えば、不名誉や病気、友人がいないこと、死などを恐れるが、勇気ある人はこうしたすべての悪いものに関わっているようには思われない。というのも、恐れるべきであり、恐れるのが美しく、恐れないことがむしろ醜いような事柄は限られていて、例えば不名誉がそれに当たる。・・・では一体、恐ろしいもののうち、勇気ある人はどのような事柄に関わるのか。それは最も重要な事柄ではないか。実際、そうした人以外に、凄まじい出来事にたじろがない者は誰もいないからである。そうしたもののうち、死は最も恐ろしいものである。なぜなら、それは命の果てであり、死者にとってはもはや善いものも悪いものも一切がないと思われるからである。・・・とすれば、そもそも勇気ある者が関わりをもつのは、一体どのような場面での死なのか。あるいはそれは、最も美しい場面での死であろうか。実際、戦争における死はそうしたものである。なぜなら、それは最も重大で、最も美しい危険における死だからである。」

(アリストテレス『ニコマコス倫理学』第3巻第6章、神崎繁訳、岩波書店)

⑤「オイディプス：奴隷か、それともライオス（*オイディプスの実父）の、身内として生まれた子か？ - 羊飼いは、ああ、いまやとうとう、口にするのも恐ろしいことを、言わねばならぬ羽目に追いつめられたか！ - オイディプス：このわしにとっても、聞くも恐ろしいこと。それでもわしは、聞かねばならぬ！」(『オイディプス王』1168-70、藤澤令夫訳)

⑥「恐れてみたとて人間の身に、何をどうすることができましよう。人間には、運命(偶然)の支配(ta tes tyches)がすべて。先のことなど何一つ、はっきりと見通せるものではありません。できるだけその時々の成り行きに任せて生きるのが、最上の分別と申すもの。」

(同、977-79)

